

もうこれで皆渡つてしまつたのね。さ又前の様に行列を作りませう。お父さん鼠はお餅を持つて先頭よ、其の次は馬鈴薯を持つた一郎ちゃん鼠でしたね、其の次がビスケットを持つた二郎ちゃん鼠、そして石鹼を持つた三郎ちゃん鼠、一番おしまひがお人蔥の頭を持つたお母さん鼠でしたね。さ、歩き出しましたよ。もうソーット歩かなくたつて良いの。此處にはもうお猫さんは居ないんですもの。皆元氣で歩きました。そしてほらさつき節穴を猫さんご間違へた事や、蜘蛛さんに叱られた事や、お家ごお家の間を飛び越して來た時の事を色々話し合つたり笑つたりしながら新しいお家へお引越しって行きました。

おしまひ

## 二等

# 逃げない小鳥

佐 藤 久 子

もうすぐ冬になります。

山では木の葉が紅くなつて、つめたい風が、遠い北の方から吹いて來ました。

高い木の上で小鳥のお母さんご子供が、

「もうそろ／＼暖かいお家を見つけなくてはならないね」

ごお話をしるました。

たべるものもあまりみつかりません。お母さんが小さい小鳥に云ひました。

「今頃になるご、村の子供が鳥籠を持つて、お前のやうに小さい可愛いゝ鳥をみつけに来るからね、食べものを見つけるさきも、よほざ氣をつけないといけないよ」  
子供の鳥は「うん／＼」ごお返事をしながら、早く飛びたくて飛びたくてたまらないやうに羽

根をピク／＼動かしました。

「おかあさん、もういゝでせう。行つてもいゝでせう」

小鳥は元氣にさび立ちました。

秋の空は海のやうに青くて、さうまでも、さうまでもつゞいてゐます。

村から、子供達が鳥籠を下げて山へさやつて來ました。

鳥籠の中には、それにも一羽づゝ鳥が入つてゐました。イスカやヒワやムクドリでした。

子供達は左手に鳥籠を、右手に、もち竿を持つてゐます。

與四郎はヒワをおさりに持つてゐました。

高い木の下へ來るごとく籠を枝に下げて、持つてゐたもち竿を側に立てかけるごとく、そつと竹やぶの中に入つて行きました。

籠の中の鳥がピピッピピッピなきはじめるごとく、あいうがいからか小鳥達がよつて來るのです。他の子供達は小鳥がかかる頃まで、山へ登つてあそんでゐるのですけれど、與四郎はいつも離れてじつと様子をみてゐるのでした。

ほら、もう小鳥が來ました。さつきの小鳥です。小鳥はすいぶん飛びまはつて、すつかりくたびれました。ふと下をみると、

「おや？　おかあさんだ」

籠の中にあるのはたしかにお母さんのやうに思はれました。小鳥はびっくりして、お母さん島のたぐろへいかうごとく、そばの一番近い細い枝の先にさまりました。

あら、さうしたのでせう。枝の先のべごべごしたものに足がくつゝいて離れなくなりました。枝ごともつたのは、もち竿でした。あわてゝ「バタ／＼」ごもがくごとく、足は一層枝の先にくつきました。羽根もすつかりくつゝいて動かすことが出来なくなりました。

するごとく、竹やぶの中からさつきの子供がさび出して來ました。與四郎でした。

「やあ、ヒワがかゝつた。うまいぞ、僕が一番だ」

與四郎は、もち竿から小鳥をはなして、そばの鳥籠の中へ入れました。中に入つてゐたのは、お母さんではありませんでしたけれど、小鳥ごおんなどヒワの子供でした。小鳥は急に悲しくなつて、

「おかあさん、おかあさん」

こなきました。でも、お母さん鳥はさうしたのか助けに来てくません。

與四郎は籠を下げて山を下りて行きました。

「おとうさん、僕、もう取つたよ、ヒワだ。可愛い、ヒワだよ」

與四郎さんが嬉しさうに云ひます、爐端に坐つてゐたお父さんが、

「さうか、それぢや明日は、町へ行つて皆一緒に賣つて来よう」

云ひました。與四郎はしばらく考へてゐましたが、

「ねえ……おとうさん、このヒワねえ、僕に頂戴よ、これ一羽でいゝから」

「なんだ、おまへのもんだ、いゝやうにしろ」

お父さんが云ふと、與四郎はさび上つて喜びました。

そして早速別の籠へ移して餌と水を入れる、勉強部屋にしてゐる納屋の方へ持つていきました。

「毎日々々鳥取りしてゐるのに、あんなヒワぐらゐに喜んで……おかしなやつだ」

お父さんが、圍爐裏のそばから與四郎の後姿をみてゐました。

與四郎は毎日學校から歸る、すぐ山へ鳥取りに出かけるのですけれど、ぎんない、鳥が取れても、あのヒワを賣つてしまふことは出来ませんでした。ヒワの黄色い羽根は與四郎がさはるこやはらかくて、小さいからだが暖かいやうに思はれました。そしてヒワのまるい黒い目が、やさしさうに與四郎を見てゐるやうでした。

小さい小さい可愛いヒワを賣つてしまふことは出来ません。興四郎は納屋へ入つて、こつそりヒワにいろんなお話をしてくれることがありました。ヒワは興四郎が大好きになつて、もうお山へ歸ることも忘れてゐました。

ばか／＼ご暖かい日でした。

納屋のさきで、小鳥はふくおかあさんのことを思ひ出しました。もうこんな寒い冬になつてしまつたのに、あのお母さん鳥はもうしたのでせう。小鳥は急にお母さんに會ひたくなつて、「おかあさん。おかあさん」と

こなきました。興四郎もまだ歸つて來ません。小鳥はふく遠くの方で、「ピイ」と聞く聲を聞きました。

「おや？」

小鳥はもう一度ないでみました。すると、小さかつた遠くの鳴聲がだん／＼近づいて来ました。小鳥は一生懸命になきました。

「あ、おかあさんんだ！」

小鳥は嬉しくて、

「おかあさん。おかあさん」

羽根をぱた／＼させて、お母さんのからへいかうござしました。でも、籠の戸がしつかりしまつてゐて駄目でした。お母さん鳥は籠のそばへ来て、

「あゝ、おまへは元氣だつたね、おかあさんはちゃんとさがしたかわからぬのよ」

と云ひました。それからお母さん鳥と小鳥は、籠の中さ外で、たくさん／＼色々のお話をしました。小鳥は興四郎さんにつかまつてから、ずっと興四郎さんに可愛がつてもらつたことをお話をしました。

「おかあさん。おかあさん、わづか／＼もいかないで」とからつしゃいね、興四郎さんも

あつら喜びますよ」

お母さんは、「えへへ」とお返事をしました。でも與四郎さんが歸つて来るまでは、小鳥の籠へ入るこゝが出来ません。

その時、與四郎さんの元氣な聲が聞えました。

「コトトリヨ、コトリ、カワイイヒワヨ」

「あ、よしらうさんだ」

與四郎が籠の方をみると、籠の上にもう一羽のヒワがいました。

「おや、ヒワだ」

籠のヒワとそのヒワが、「ピィピィ」と聲を合せて鳴きました

「あ、ヒワのおかあさんだ」

與四郎はびっくりしました。

その時、すぐに思ひました。

「さうだ、はなししてやらう。おかあさんのそばへやらう」

與四郎は籠の戸を開けました。小鳥を逃がしてやらうと思つたのです。ところが、小鳥は逃げないばかりか、外の親鳥までが籠の中に入つて来ました。

お母さんと小鳥は、嬉しきうに「ピィピィ」と頭をすりつけてゐます。

與四郎はおもはずに「へへ」と笑ひながら、それをみてゐました。

ほかへへ冬の日が、小鳥たちの黄色い羽根に暖かさうに光りました。